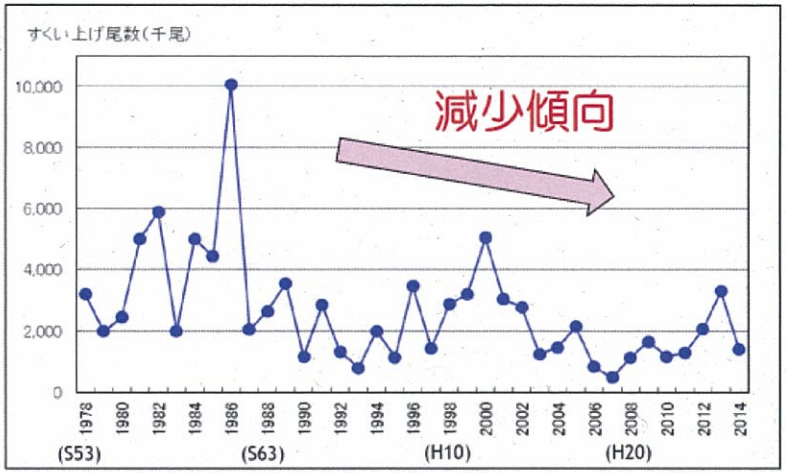
3. 加藤清正由来の八の字堰の形状の復元による瀬の再生

H28.2.25
八代河川国道事務所

■遙拝堰下流の環境面の課題

・球磨川下流域には、かつて多くの瀬が存在していましたが、過去に行った砂利採取や河川改修により、瀬の多くが減少しており、河口から9km付近に存在していた遙拝堰直下の広大な平瀬が現在消失しつつあります。
・その結果、球磨川の観光資源の１つでもあるアユ等の魚類も年々減少傾向にあります。



※すくい上げ漁：球磨川堰左岸の魚道で捕獲したアユを上流に放流するもの

球磨川漁協による稚アユのすくい上げ

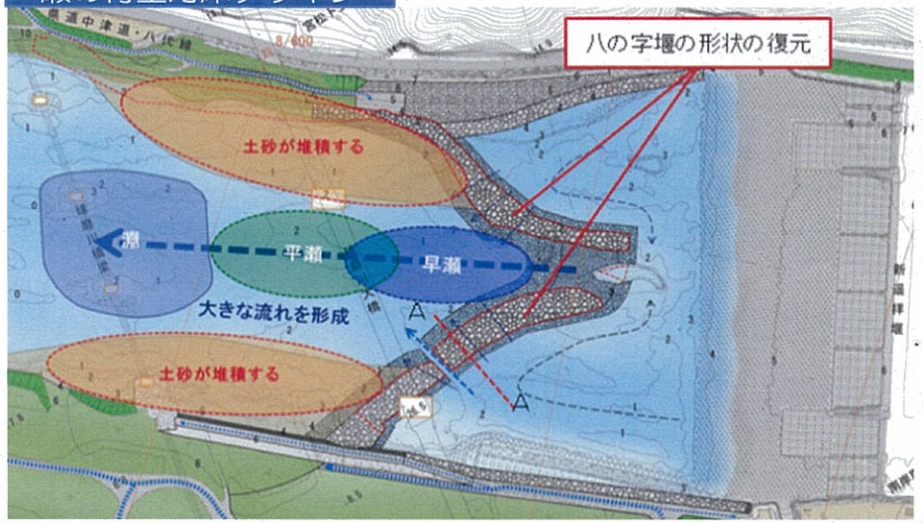
3. 加藤清正由来の八の字堰の形状の復元による瀬の再生

H28.2.25
八代河川国道事務所

■八の字堰の形状の復元による瀬の再生

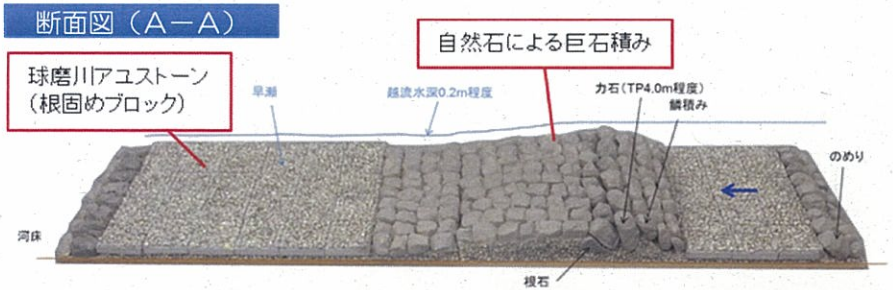
・アユをはじめとする水生生物の良好な生息環境を再生するため、遙拝堰直下に八の字堰の形状を再現し、かつてあった良好な瀬を再生する取り組みを行っています。

瀬の再生河床デザイン



完成イメージ

断面図（A－A）



「球磨川下流域環境デザイン検討委員会※」における河床デザインへの思い（抜粋）

八の字堰の「八」は、八代の「八」でもある。
球磨川の瀬・淵を再生するにあたり、この「八」の形態を採用することで、多様な河川環境と共に、かつてそこに在った風景と地域の歴史を蘇らせ、新たな八代の財産とする、これは「良好な環境再生」と「歴史的土木遺産の再現」を融合させる試みである。

※「球磨川下流域環境デザイン検討委員会」は、八代河川国道事務所が球磨川下流域において実施する事業に対し、自然環境との共生のあり方について、学識経験者や地元有識者から意見を求めるために八代河川国道事務所が設置した委員会です。

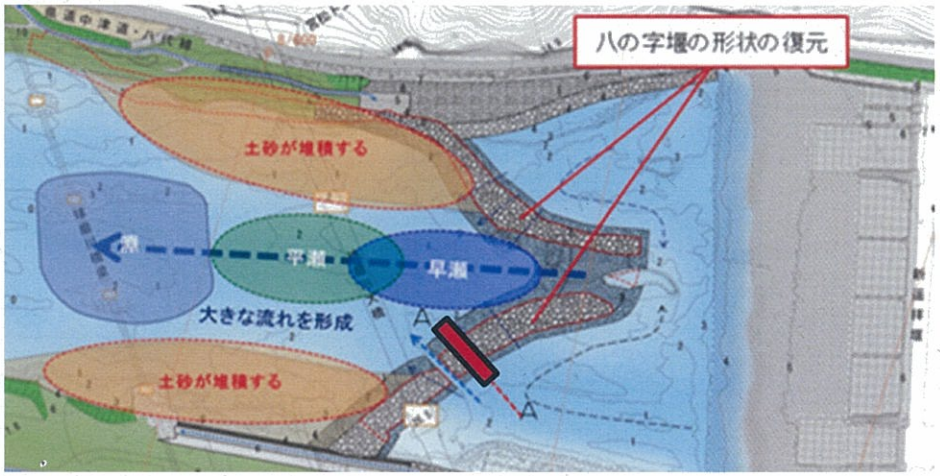
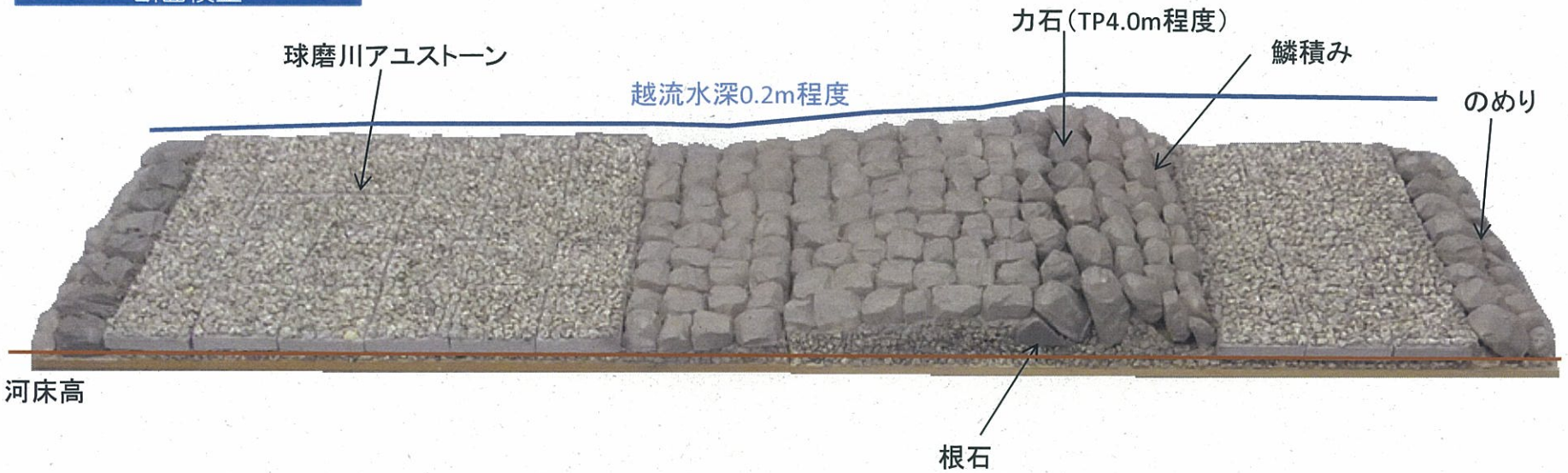
3. 加藤清正由来の八の字堰の形状の復元による瀬の再生

■八の字の石組みの構造

・八の字の石組みの構造は、加藤清正が携わった緑川の「鵜の瀬堰」等の文献を参考にし、石の大きさや組み方を決定しました。

・特に大きな「力石」を中心に配置し、流水の負荷で互いに支え合い、水の流れを利用する仕組みです。

・巨石を組み合わせた構造とすることにより、多孔質な空間ができ、ウナギなどの生息も期待できます。



断面模型